趙軍著

辛亥革命与大陸浪人

山根　幸夫

本書の著者趙軍氏は華中師範大学の副教授であり、辛亥革命の研究者である。八年前に京都の仏教大学に一年間留学、三年前に再来日して東洋文庫で研究を続けている優秀な学者である。日本滞在が長いことから、日本の中国近代史研究者との交友関係は多い。

さて、趙氏は辛亥革命の中でも、特に革命運動と日本の大陸浪人との関わりについての研究を進めている。中国の学者でもこのようなテーマを研究する者がいないわけではないが、趙氏の大陸浪人研究は最も詳細で、その問題点を深く摘出している優れたものである。次に、本書の目次を紹介してみよう。

第一章　緒　論
第一部　辛亥革命波涛中の一支異色勢力
第二節　一時極盛の大アジア主義
第二章　大アジア主義の溯源
第一節　大アジア主義及びその社会歴史的土壌
第二節　大アジア主義の醞釀と形成
第三節　アジアモンロー主義――〝支那保全論〟の産生
第三章　大陸浪人の大アジア主義
第一節　浪人と大アジア主義の結合
第二節　民権派の闘士より右翼の巨頭に至る――頭山満の大アジア主義
第三節　〝半生夢覚懐落花〟――宮崎兄弟の〝支那革命主義〟
第四節　〝苦節十年併合謀〟――内田良平の大アジア主義
第五節　革命旋流下に逆流して動く者――川島浪速の大アジア主義
第四章　辛亥革命と大陸浪人
第一節　〝患難の交〟――浪人と興中会、同盟会
第二節　革命風暴の別の一面――武昌起義前後の大陸浪人
第三節　〝反省〟と新しい〝確立〟――辛亥革命以後の大陸浪人
第五章　結　語
第一節　孫中山の〈大アジア主義〉演説と大アジア主

義の終結

第二節　大陸浪人の結幕とその歴史評価

＊　＊　＊　＊

右の如く、本書では大アジア主義に関する考察が全体の三分の二近くを占め、本書の表題となった辛亥革命と大陸浪人との関係は、全体の三分の一に止まっている。然し、大アジア主義は大陸浪人の行動原理となっていたから、このような構成になったのも、当然の結果と言えるかも知れない。次に、本書の概容を順を逐って紹介してみたい。

緒論ではまず大陸浪人について考察し、先駆的人物として荒尾精、根津一らを挙げる。次に、孫文ら革命派の周囲にいた玄洋社の頭山満、平岡浩太郎、黒竜会の内田良平、その他に宮崎滔天、平山周、萱野長知らを挙げる。更に、武昌起義後、宗社党と結んで清朝復辟を謀った川島浪速、佃信夫らを挙げる。その他、馬賊の中に混迹した伊達順之助、薄益三、小日向白朗らをも挙げている。此等の大陸浪人に共通する社会心理として、㈠、在野の民間意識と権威に反抗する精神が強く、玄洋社、黒竜会系の浪人に顕著であった。㈡、大言壮語し、豪蕩不羈の国士的風格をもつ。㈢、系統的な深い思想理論はなく、常に激情、冒険心（義侠心）に駆られた行動をとる。㈣、成敗利鈍を計らず、献身精神で手段を選ばず活動する。これら大陸浪人の活躍が最も盛んであったのは、一八九七―一九一七年前後の二〇年間であった。続いて、大アジア主義の考察に入るが、その定義として、(1)、欧米列強の侵略に対抗するため、日本を盟主として団結する、(2)、アジア各民族、各国家の団結を呼びかけ、欧米列強の圧迫、侵略に抵抗する、との二説がある。両者の差異は、日本を盟主とするか否かに関わり、日本を盟主とする思想は、結果的に、日本帝国主義侵略の理論になったとする。次いで、大アジア主義と米国のモンロー主義を比較して、両者が共に対外侵略の口実になった点が共通するという。而して大アジア主義者を左派と右派の両派に分け、左派には宮崎滔天、平山周、萱野長知らがおり、右派には頭山満、内田良平らがいたとする。

第二章では、大アジア主義成立の諸前提を検討するが、同時に大アジア主義は時代の産物であり、日本民族が「西力東漸」の国際情況下で採った一種の対策であったとも云う。同時に、明治の資産階級の願望と要求を反映したものであった。それでは、大アジア主義はどのようにして形成されたのか？　それは、自由民権運動が挫折した結果、日清提携論、興亜論などと結びつき、「清韓改造論」を中核として形成されていったという。更に、福沢諭吉の「脱亜論」があるが、脱亜論は興亜論などの思想とは対極的な観

点で、後に登場してくる右翼大アジア主義思想の先駆的なものであったと指摘している。

一八九八年、東亜会と同文会が合併して、東亜同文会〈会長は近衛篤麿〉が成立したが、これは従来の各種の大アジア主義主張を統合して、「支那保全論」「興亜論」の方向に集約したものであった、という。

第三章では、大陸浪人たちの大アジア主義を、頭山満、宮崎兄弟、内田良平、川島浪速らに分けて、それぞれの観点を叙述する。第一に、大陸浪人とアジア主義が結びついた渕源を検討し、その発端は「大陸経綸」、「大陸経営」の思想に発端するという。彼らがこのような思想を抱くようになった背景には、いわゆる武士道、武士精神が在ったとする。没落武士が大アジア主義と結合した結果、大陸浪人が生みだされた。このような大陸浪人の先駆的存在は、荒尾精、根津一らであった。続いて、東亜同文会の成立によって、大陸浪人と大アジア主義が完全に結合したと指摘する。

次に、第二節で民権派の闘士から右翼巨頭となった頭山満の大アジア主義を考察する。頭山は博多藩の中級武士の出身で、初め熱烈な民権論者であったが、一八八一年〈玄洋社〉を結成してから、国権主義に転向した。彼は日・中・印三国提携の構想をもち、特に日・中提携・聯合を重視していた。然し、頭山の思想の根底には強烈な国家意識、国家観念があり、「日本帝国」の国家利益を中心にすえた大アジア主義であった。換言すれば、「尊王」「攘夷」を基礎とした大アジア主義であった。玄洋社憲章の第一条は「敬戴皇室」とあるように、彼は熱烈な尊皇思想の持主であると同時に愛国主義者であった。又、強烈な排外主義、ショービニズムの持主であった。それ故、彼のアジア主義は西方勢力の駆逐を叫ぶと同時に、又日本の勢力をアジア及び世界各国に拡大し、日本を盟主とする「軍事同盟」によって、「世界一家」の大業を完成しようというものであった、とする。

第三節では宮崎兄弟の「支那革命主義」を論ずる。彼らは熊本の郷士の家に生れた。「支那革命主義」は最初弥蔵の提出した思想であった。日本における自由民権運動の挫折に直面して、運動の対象を中国革命に向け、それを発条として日本、朝鮮をも革命し、日朝中三国連盟を達成し、更に世界革命に発展させようというものであった。著者はこのような思想も一種の典型的大アジア主義であるという。兄弥蔵の支那革命主義に賛同し、これを実践しようとしたのが滔天であった。当時、既に日本人の間には中国蔑視の偏見が滲透していたが、滔天は中国人大衆中に包蔵されている巨大な潜在力をはっきり認めており、この認識を

基礎に、中国蔑視、中国人鄙視の偏見を打破し、中国人民の痛苦を理解し、中国の命運に同情し、自己の理想を中国に付托して実現しようとした。それが支那革命主義であり、彼の大アジア主義であった。宮崎兄弟の大アジア主義こそ、純真な大アジア主義であった。彼らは西方列強の東アジアにおける「弱肉強食」、相互の植民地或いは勢力範囲の獲得競争に反対する口号として、人類平等相愛、世界一家の説を提唱し、その具体策として打ちだしたのが大アジア主義であった、と指摘している。

第四節では内田良平の大アジア主義について考察する。内田も没落武士階級の出身であり、大アジア主義思想を抱き、中国革命運動にも参加した。然し、内田の思想や政治抱負は、宮崎兄弟らと大きく異なっていた。宮崎兄弟は自由民権路線の上に、大アジア主義を提唱したが、内田は国家主義、国権主義の路線の上に、アジアに覇を称し、世界に雄を称し、「宏図大略」という方向を目ざしていた。彼は一八九八年シベリアを探険し、帰国後朝野各界に「対露必戦、必勝」を宣伝した。彼が孫文らの革命運動を支援したのは、革命後「満蒙」等の地を日本に譲渡することを約束したからである、とする。内田は一九〇一年「黒竜会」を結成したが、これは内田自身の大アジア主義思想が形成された標識であると、著者は認める。事実、黒竜会結成後、彼の関心はロシアに向けられ、日露戦争後はひたすら韓国併合にむけて動いた。要するに、内田の大アジア主義は、明白に日本帝国の利益、日本帝国主義の発展に役立つための大アジア主義であり、典型的な右翼大アジア主義であった、とする著者の指摘は首肯できるものである。

第五節では、川島浪速の大アジア主義を採りあげる。彼は松本藩の武士家庭に生れ、東京へ出て中国語を学んだ。義和団の際、陸軍通訳として中国へ渡り、義和団平定後は京師警務学堂の教授として、中国における活動の基盤を築いた。著者の云うように、川島は早くから満州、東蒙の地に、日本と提携する新国家を建設する計画を抱いていた。他の大陸浪人に比べて、最も早く「満蒙」独立を企てたものであった。川島は基本的に行動型の大陸浪人であり、自己の抱負を自ら実践しようと行動した。遮二無二突き進もうとする彼の態度は、他の大アジア主義者とは大きく異なっていた。川島は中国資産階級の革命に反対する大陸浪人の見方を代表する者であり、頭山満、内田良平らの国権主義、拡張論者に比べてもはるかに強硬であった。第一次「満蒙独立運動」は、日本政府が列強各国の抗議を顧慮して、最初は支持していたが、後には反対にまわり、正式に挙兵する前に、破産してしまった。第二次「満蒙独立運動」は実際に発動したが、袁世凱の急死により、日本政府

も方針を転換し、その運動は抑圧された。こうして川島の夢は潰れ去った。然し、川島の構想は、日本軍部の軍国主義侵略、拡張活動と完全に合致しており、その頂点には天皇が置かれていた。著者によれば、川島のこのような大アジア主義は、結局「支那革命主義」と絶対に同日に語ることはできない、としている。

以上、第三章の所論を要約して、著者は次の如く結論している。中国資産階級民主革命運動に対する態度で分類すれば、頭山満、内田良平は中国革命を利用して、侵略拡張目標を達成しようとする右派である（然し、頭山と内田の間でも、問題によって多くの意見と行動の不一致がある）。川島は頑固に革命に反対する極右派であり、宮崎滔天は相当まじめな態度と情熱を以て革命を支持する左派であった。但し、左派勢力はきわめて少数であったことは云うまでもない。

次に第四章では、本題の辛亥革命と大陸浪人の関係を論じている。第一節では先ず大陸浪人と中国革命党人（興中会、中国同盟会）との結びつきを述べるが、著者は中国革命に関わった大陸浪人を㈠、自由民権主義者の宮崎滔天、萱野長知ら、㈡、国権主義者の頭山満、内田良平ら、および㈢、政界人の犬養毅、大隈重信ら、の三集団に分けている。上述の三集団と孫文ら革命派との結びつきを起点として、大陸浪人および政、財界人は日本政府の黙認の下に、中国の革命運動に介入した、としている。次に、これらの大陸浪人が革命準備期に、具体的にどのような動向を示したかを具体的に述べる。更に、これらの中国革命を支援する集団の分・合を具体的に述べる。特に著者は、黒竜会一派の大陸浪人が積極的に「日韓合邦」運動に参与し、その侵略、拡張主義分子の面目を暴露し、孫文も彼らに対して警戒心を抱くようになった、という指摘は注目すべきである。

第二節では、武昌起義前後の大陸浪人の活動を具体的に述べる。武昌起義が発生すると同時に、多数の大陸浪人が大陸へ渡って、実際に革命運動に参加した。当時、日本政府は清朝に加担し、革命派を抑える方針を採っていたが、表面上は厳正中立の態度を示していた。然し、この時期、大陸浪人は革命に情熱を抱き、中国大陸でも日本国内でも掀起して活動した。この時期は大陸浪人の活動史上の最高潮であった、と著者は指摘する。続いて、南京臨時政府が樹立されると、革命派に支援を提供した右派大陸浪人たちは、自らの投資したものに対する見返りを求めるようになった。日中借款交渉が始まると、多数の大陸浪人や政客が来華して、南京臨時政府の革命党人をとりまき、直接革命政権の内外政策に影響を与えようとした。それらの代表的

人物は頭山満と犬養毅の二人であったと云う。然し、これらの大陸浪人には各自系統があり、互いに統属せず、彼らの思想は五花八門であった。まず、右派大陸浪人の間で、分裂活動が起った。彼らのやることは完全に火事場泥棒で、利権を獲得し私利を貪ぼろうとした。こうして大多数の大陸浪人は中国革命に対する情熱を喪失し、中国革命と疎遠になっていったという。最後に、川島浪速による第一次満蒙独立運動について述べている。

第三節では、辛亥革命以後の大陸浪人の動向について述べる。第二革命前後の彼らの動向を述べた後、革命失敗を機に、その不満と失望によって、過去の行動を「反省」し、新しい態度を確立しようとする者が現われた。即ち、内田良平一派は袁世凱が登場して、満州譲渡の願望が失われ、而も孫文らが袁に妥協したことを怒って、孫文、黄興らを「恩将仇報」、「忘恩負義」と非難し、以後中国革命運動との関係を断った。頭山満らはこれと異なり、第二革命失敗後に日本へ亡命した孫文らに対しても、熱情を示した。頭山らは孫文ら革命派の将来に希望を失っていなかったのである。宮崎滔天は今回の失敗の原因を反省し、今後は如何に運動を展開すべきかを考えようとした。彼は従来の日中関係を反省し、自己の思想主題を一歩進めて、更に人民性と革命性を一そう深め、より高いレベルで時政を批評し、日中両国人民に真正の和平「親善」を呼びかけた、と著者は指摘する。但し、宮崎らは結局新しい出路を確立することはできず、日本軍国主義の波に呑みこまれてしまった。最後に、川島浪速による第二次満蒙独立運動について述べるが、これが在野の色彩を脱却して、日本軍国主義侵略の尖兵に転化していたという指摘は、まさにその通りであろう。

第五章の結語では、まず孫文の神戸における「大アジア主義」演説について述べ、これは日本の右翼大アジア主義者が、日本を盟主として「覇道」を以て大アジア主義を実現しようとする主張を、孫文が否定したものと論じている。最後に、大陸浪人の結末とその歴史的評価について論じめいるが、それは以上に述べた所を要約したものである。

著者は早くから日本の大陸浪人の問題に着目し、丹念に個々の大陸浪人の動向を考察している。著者が日本に留学することがなければ、このような詳細な研究を進めることは不可能であったと思われる。著者は先年、京都の仏教大学へ来た時、基本的な文献を多数購入して帰国した。それらを利用して、大陸浪人の問題を考察した結果が、本書として結実したのであろう。それ故、本書で利用されている史料は、圧倒的に日本語文献が多い。日本人の研究書も実

によく引用されている。殊に、『東亜先覚志士記伝』などは屢々引用されている。その結果、本書の叙述はきわめて詳細になり、場合によっては煩瑣になりすぎることもある。日本人の読者なら充分理解できるであろうが、中国人の読者にとっては、余りにも煩瑣すぎて、理解に苦しむこともあるのではなかろうか。その点、もう少し工夫があっても好かったのではないかと思われる。

然し、我々日本人の側からみれば、実に煩瑣な個々の事実をこれだけ整理して、まとめあげた著者の努力は敬服に価する。これは偏えに著者のすぐれた日本語読解力の賜物というしかない。他の中国人研究者にとっては、容易に真似のできないことである。その意味では、中国の学界にとっても、きわめて貴重な成果が提供されたものと言えよう。

前述した如く、著者は大陸浪人を左派、右派、極右派の三者に分類する。因みに、右派は玄洋社系（頭山満）と黒竜会系（内田良平）に分けている。而して各派の提唱する大アジア主義はそれぞれ異なっていたとする。彼らの大アジア主義の現象的な相異はわかるが、本質的にその大アジア主義に相異があったのであろうか。著者は各派の中国革命に対する関わり方を検討することによって、このような相異を導き出している。然し、同じ右派に属する頭山派と内田派では本質的な差異はなかったのであろうか。同じ右派に分類する以上、本質的な差異はなかったことになる。但し、著者は本文中で両派の相異を強調している点もある。この点をもう少し明確にすべきではなかったろうか。いわば、一般に大アジア主義の名で、一つのものとして受取られがちなものを、もう少し理論的に解明すべきではなかったろうか。

筆者は本書の叙述が中国人の読者にとって煩瑣になりすぎているのではないかと述べたが、これは著者が大陸浪人たちの個々の行動を大小もらさず追いかけようとしたため、このような結果をもたらしたのではないかとも考えられる。これも勿論必要なことではあろうが、筆者は各派の大アジア主義の主張をもっと丁寧に分析し、各派の主張の相異点をよりはっきりと浮びあがらせてほしかったと思う。

それにしても、本書を完成するための著者の苦労はどれだけ大きなものであったか、想像に難くない。然し、日本側の文献の利用についても、大陸浪人を肯定する側に立つ文献と、これを否定する立場の文献との利用に関して、明確な区別がなされているか否かも考えてみる必要があろう。実はわが国でも大陸浪人に関する本格的な研究はほとんどない。例えば、山川出版社の『日本外交史辞典』にも

「大陸浪人」の項目はない。個別研究として、僅かに初瀬竜平『伝統的右翼内田良平の研究』（九州大学出版会、一九八〇）が挙げられるだけではあるまいか。本書を契機として、わが国でも大陸浪人に関する研究が本格的、組織的に進められることを期待してやまない。

（一九九三・一・一五）

（一九九一年四月、北京、中国大百科全書出版社、A五判、三〇五頁）

アリス・シャールキョジ著

十七～二十世紀のモンゴルにおける政治的予言

宮脇　淳子

本書の著者アリス・シャールキョジ博士は、ハンガリーの科学アカデミーに所属するモンゴル学者で、長くモンゴル語版『マハーヴュトパッティ Mahāvyutpatti』（翻訳名義大集）[1]の研究に従事し、博士号を取得した。ただしその『マハーヴュトパッティ』の研究は、ハンガリーの出版事情で順番待ちのため、残念ながら未刊行である。

彼女は常設国際アルタイ学会 Permanent International Altaistic Conference の古くからの主要メンバーの一人で、毎年の学会では、東欧圏、旧ソ連に所蔵されている様々なジャンルのモンゴル資料の研究や、モンゴルの現地調査に関する報告を行っている。当然のことながら、モンゴルにおけるチベット仏教やシャマニズムに関して造詣が深い。彼女が行ってきた興味深い研究発表のいくつかを評者自身も聞いているが、英文の著書が出版されるのは始めてではないかと思う。